

第1回 JR 加古川線（西脇市－谷川間）維持・利用促進ワーキングチーム会議要旨

日 時 令和6年7月16日(火)15:30～16:53

場 所 柏原職員福利センター1F 会議室

出席者 別添出席者名簿のとおり

内 容

<開会挨拶>

【片山委員（西脇市長）】

この加古川線のワーキングチーム会議も今年で3年目を迎え、特に今年度は、旧・野村駅、今の西脇市駅から谷川駅間が開業して、加古川線全線開業100周年を迎える。先週、7月7日に、その記念セレモニーを西脇市駅で開催し、午後には俳優の六角精児さんのトークショーをオリナスで実施した。今年度は100周年記念事業をJR西日本、丹波市など関係者の皆様と連携して進めていく。100周年のキャッチフレーズは「ありがとう&おめでとう加古川線全線開業100周年」であるが、ワーキングチーム委員の皆様の団体が実施する利用促進の取組にも、このキャッチフレーズを掲げていただき、一体となって、機運の醸成を図りたい。ありがとう100年、そしてこれからも100年ということで、よろしくお願ひしたい。

また、先月の6月30日にはJR加古川線沿線の地元の3つの地域団体からなる「JR加古川線（西脇市駅－谷川駅）維持・利用促進地域協議会」が発足した。この団体は、地域団体自らが、鉄道存続への熱意から立ち上げられた新しい組織で、沿線地域の鉄道への意識の向上の表れと思っている。六角精児さんは『ローカル線は毛細血管』とおっしゃっていたが、この地域協議会とともに『地域を残す』ために何ができるかという視点で、利用促進策に取り組んでいきたい。

<資料説明>

【事務局説明】

資料1：令和6年度 JR 加古川線(西脇市－谷川間)維持・利用促進ワーキングチームについて

資料2：昨年度 WT 会議の主な意見と令和6年度以降の取組の方向性

資料3：JR 加古川線WT 主なR5年度施策の実施結果等（様式1）及び（様式2）

資料4：JR 加古川線WT R6年度の主な取組（様式1）及び（様式2）

【國弘委員（JR西日本（株）兵庫支社長）】

資料5：加古川線ご利用状況説明資料〔西日本旅客鉄道株式会社〕

<意見交換>

【國弘委員（JR西日本（株）兵庫支社長）】

弊社は、2022年4月に輸送密度2,000人/日未満の線区について、線区別の収支と課題認識をお示ししている。これらの線区については、大量輸送という鉄道としての特性が十分に発揮できていないと考えられることから、地域の皆様と一緒に、現状と未来をしっかりと

り見据えながら、地域公共交通の将来像を共に考えてまいりたい。また、できるだけ、早期に、そうした議論をスタートさせたいというのが私共の思いである。

鉄道利用減少の背景としては、沿線人口の減少に加え、高速道路を初めとした道路網の充実や、道路を中心としたまちづくりの進展などにより、マイカーへのシフトがあったものと考えている。行きたいところに行きたい時間に行けるという車の優位性というのは、特にこの沿線では如実に表れていると考えており、加古川線（西脇市～谷川間）を取り巻く環境は今後ますます人口減少、少子化が進んでいく中で、厳しくなってくるという認識を持たざるを得ない。

先ほど事務局からご説明があったように、昨年度はワーキングチームと連携し、様々な利用促進の取り組みを行ってきた。またこの7月から、兵庫DCのアフターキャンペーンということで、大々的なキャンペーンを行っているところである。また、先日7月7日に加古川線100周年セレモニーとして、六角精児さんを西脇市、丹波市がお招きされ、ライブ&トークショーを開催されたが、JR西日本としても、いろいろな協力を行ってきたところである。このような取組で、一時的な利用増も見られるが、これが持続的な利用でない限り、将来にわたり鉄道としての特性を發揮できない厳しい状況に変わりないと認識している。利用促進策の実施だけにとどまらず、利用促進策のPDCAサイクルをまわしながら、鉄道をはじめとする地域公共交通に対する住民の皆様のニーズを明らかにすることで、将来のまちづくりの方向性や今後の地域公共交通のあり方についての議論もできるだけ早期にスタートさせ、自治体や地域の皆様とあり方議論を深めてまいりたい。

【池内委員（(株)ウイング神姫 代表取締役社長）】

加古川線の活性化のため、各自治体やJR西日本が協力され、年間を通じて様々なイベントをされているというのが正直な感想である。住民の方の利用促進というのは、人口減少傾向の中、現実的には厳しいところもあるので、外からの客を呼び込む観光的な要素をもう少し考えていけばどうか。例えば近隣の鳥取県の智頭急行には、「恋山形駅」という駅があるが、駅舎全体をピンク色に塗装している。この駅の1日の平均乗車人員は2人ほどであるが、観光地として、そのピンク色の駅舎を見るため、外からいろんな客が来ている。駅自体を観光素材として捉えるのも1つの方法かなと思う。兵庫県内でいうとJR福崎駅は、名の知れた観光素材が少ない地域だが、福崎町出身の柳田國男の著書に登場する河童をモチーフにしたもの（「ガジロウ」）を新たに創出している。様々な妖怪をモチーフにしたベンチを町内で設置したり、駅では巨大な水槽に入った河童のオブジェがお出迎えをすることで話題を呼び、誘客や町の活性化に繋がっている。そういった事例も参考にされたらどうかと思う。

【高田委員代理（神姫バス（株）地域事業本部副本部長）】

先ほど、いろいろ取組も聞き、その取組の効果がJR西日本の資料からも伺えるように、2022年度は利用者が伸びたということは、まさにこの取組の効果だと思った。ただ、やはり人口減少の現状ではなかなか上向きになりにくいというのは思う。反対に今、日本の中で

増えているのが交流人口である。インバウンドの訪問が大変増えており、官公庁の試算では、約3,000万人の外国人の訪問者数が、近い将来6,000万人、倍になると言われている。加古川線の特に西脇市の、日本の古き良き文化、歴史、それと地元のグルメ、こういった所を外国の方に案内し、さらに外国の方を呼び込むことが大切じゃないかと思う。今、兵庫県が取り組まれているフィールドパビリオンだが、当社も兵庫県内各地にあるフィールドパビリオンに、いかに外国の方とか、日本国内の県外の方に便利に来ていただけるか、どういうふうにPRしていくかというところを、考えているところである。

【藤本委員代理（西脇商工会議所・時政専務理事）】

やはり鉄道の重要性というのを、ひしひしと感じている。平成2年に鍛冶屋線、野村駅から鍛冶屋駅が廃止になった。やはり鉄道が無くなったことについて、非常に不便な思いをした。もちろん人口減少など、いろんな社会的な要因が変わってきているが、何とか鉄道を残していただきたい。そういったような取組をしないといけないという思いが強い。高田委員代理から話があったインバウンドの関係だとか、新しい名所づくり、それとやはり私どもは商工業者の団体であり、一番の利用促進策というのは、やはり沿線に立地する企業の「元気さ」が必要ではないか。JR西日本の方の話では厳しい状況ということはわかるが、何とかこれを覆すには非常に大きな努力が必要だと思う。

【篠倉委員代理（丹波市商工会・後藤参事）】

JR西日本の資料を拝見して、西脇市駅から南との乗車率がこんなに違うのかと驚いた。高校生の足ということを考えると、鉄道の有る無しでは、大変変わってくると思うし、通学自体ができないような状況になってくるかもしれない。住民が、やはり自分事として、鉄道の重要性をもう少し認識した中で利用していくというのが非常に大事なことになってくる。私自身も、車で移動することが多いが、土日に、鉄道を利用することによって、時間をゆったり使えるような環境を作るなど、少しずつ鉄道の利用促進を図っていきたい。企業の部分でいうとJR通勤はなかなか難しいのが現状ではあるが、月に何回か利用できるよう商工会としても応援できればと思う。

【高瀬委員（西脇連合区長会会長）】

令和5年度、令和6年度と非常にたくさんの取組をされていて、非常に頑張っておられると思う。ただ、それに比べて利用者があまり増えていないのは少しショックだ。加古川線が電化された時に、『これでやっと廃線は免れた』と喜んだことを記憶している。電化の募金の際には、『廃線になるよりましだろう』と思って募金した。なのにこのような問題が出てきているのは残念な思いがある。西脇市駅から谷川駅までが廃線となると、西脇市駅から加古川駅までが、盲腸線になってしまう。赤字だから廃線にしていくと、ますます人口減少に拍車がかかり、そういう面を危惧する。

北条鉄道では車内でおでんを食べてお酒を飲んだりするイベントをされているが、加古川

線も加古川に沿って、車窓は景色が良く、見晴らしがいい。加古川から谷川までをお酒が一杯飲めるような列車にして、黒田庄和牛を食べるとか、加古川の人をこちらに招くようなイベントをすればどうか。かなりのPRになるのではないか。

【大野委員（丹波市自治会長会会長）】

今日配付いただいた北播磨県民局の封筒を見ると『鉄道を守り、地域を守る』という言葉が入っている。前回のワーキングチーム会議で、丹波市の自治会長会ではこのような取組をやっていると申し上げたのを、このように取り入れていただくという行政の姿勢は大変立派である。できるだけ、加古川線という名前が目につくということが住民意識の高揚につながるのではないか。それから、今年度の新たな取組として、こども園も含めた社会学習利用助成制度を実施されている。私は今、こども園の理事長を仰せつかっている。園外保育をするときは園のバスを使っており、列車の利用を検討したが、園外保育に適した時間に列車が走っていない。今、ラッピング列車が走っているので、子供達が喜ぶだろうと思う。子供の時に見た列車が走っている姿は大人になっても記憶に残る。幼児教育の折にそのような経験をさせてやるということが、今後の公共交通に対する意識として残るのではないか。

【成田委員（北播磨県民局長）】

今年は加古川線全線開業 100 周年という節目の年で、また 6 月には沿線の自治協議会からなる JR 加古川線（西脇市駅－谷川駅）維持・利用促進地域協議会が立ち上がるという意味では、鉄道の利用促進の機運の高まりというものを感じている。こうしたなか、北播磨県民局では、今年度も様々な利用促進事業を展開していきたい。

一つ目は「加古川線利用促進ウィーク」ということで、播州織中吊り広告の掲出、それによる鉄道利用呼びかけを行う。二つ目として地元高校生等による文化祭等イベントの開催ということで、今年度は、日本へそ公園駅周辺で実施しようと考えている。また JR 加古川線リレーマルシェは昨年度から丹波県民局と一緒に取り組んでおり、昨年度の「黒田庄マルシェ」は大勢の方にお越しいただき、大変な賑わいづくりに繋げることができ、今年度は、比延（ひえ）駅周辺で開催する予定。

先日のセレモニーで両市長、また國弘支社長がおっしゃったが、今回の 100 周年を契機に、関係者が連携を図り、利用促進の取組を進めてまいりたい。ゲストでお越しになった六角精児さんから、『ローカル線には日本の原風景がある。沿線の人たちにもっと存在意義をわかってもらうことが大切だ』そして、『100 周年を機に、地元の人が路線の価値を改めて知ることが大切ではないか』との貴重なご意見をいただいた。まさに、このようなご意見が非常に重要であると考えており、地域住民が加古川線の大切さを再認識し、大勢の方に利用してもらえよう、盛り上げていければと思う。地元の方々や外から来られる人の選択肢に、今は車しかない状況であるが、その中に加古川線を一つの選択肢として、思い浮かべてもらえるようなことになればと思う。

【糟谷委員（丹波県民局長）】

丹波県民局では昨年度に引き続き、マルシェを開催する。まず、8月22日の開催に向けて、現在、県民局の若手職員によるユースチームが久下自治振興会の方と一緒に準備に取り組んでいる。若い方がアイデアを出しながら、加古川線利用促進に取り組んでいくことも意味があるのではないかと。ワーキングチームの皆様も、ぜひ加古川線に乗ってご来場いただきたい。また、今年度新たな取組として、丹波県民局が事務局を持つ、丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進協議会で、7月25日に久下村駅発着の小学生を対象とした恐竜化石の学習や、環境保全を体験するバスツアーを実施する。バスツアーについて、加古川線のダイヤに合った時間で開催することになっているので、西脇方面からの参加のPRをお願いしたい。

また、二次交通も大事だと思っている。JRを利用して、そこからどのような交通手段で移動するかも大事だ。大阪・関西万博を見据え、誘客を促進するという意味でも、久下村駅と「ちーたんの館」を結ぶ、環境にやさしいグリーンスローモビリティを試験的に導入しようと検討している。

さらに、現在、フィールドパビリオンが丹波地域23箇所、北播磨地域37箇所と聞いているが、丹波県民局では駅発着のバスツアーを検討している。

【片山委員（西脇市長）】

福井に若狭町という原発のある町があるが、若狭町と西脇市は、もし、若狭町で原発事故が起きた場合は、西脇市に住民を受け入れるという協定を結んでいる。ちょうど一筆書きで、最短で3時間くらいで鉄道で若狭町から来ることができるので、災害時のリダンダンシーとして加古川線も含め鉄道が活躍すると思う。また二次交通という観点から、駅の放置自転車、約100台中から、使用できそうな自転車を貸し出し用として再利用している。駅に置き自転車があり、スマートフォンなどで予約をしたり、返却できるようなことができれば、すごくいいし、自転車の運搬に際し、列車を利用して、貨物として移動させる。人も乗せるが物も乗せる発想が必要ではないか。

ふるさと納税の特典で、和歌山県すさみ町では、50万円寄付された方の特典として、1日駅長の返礼品がある。駅長の体験がこの路線でもできないかなど。西脇市駅にしか駅員がないので、1日駅長というのは難しいが、そのような体験ができれば面白い。

【林委員（丹波市長）】

利用促進の取組はいろいろやっているが、すぐに結果は出るものではない。ただ、何もしなければ利用者は増えない。利用促進を地道にすることで一人一人の行動が変容して、徐々に加古川線利用が増えていくのではないかと。國弘支社長がおっしゃるような効果は一過性ではあるが、各種利用促進事業で、沿線住民の方にご協力をいただき、大勢の方に来ていただいた。加古川線の事を我が事として考え始めてこられたのではないかと。この勢いがそのまま続くよう、利用促進策をしっかりとやっていくことが大事。今年度に入ってから、リバー

サイド楽市とサンマルシェの同日開催や、さきほどから話に出ている加古川線沿線地域住民による JR 加古川線（西脇市駅－谷川駅）維持・利用促進地域協議会も立ち上がった。何とか自分たちの力で加古川線を守ろうという話も出ており、大変ありがたく思った。そういう組織ができることが、また利用促進策の1つではないか。先ほど國弘支社長から、利用状況の推移のご説明をいただいた。数値的にはまだまだ少ないが、少しずつ上向いている。ぜひ引き続き利用促進に力を入れていきたい。

【國弘委員（JR 西日本（株）兵庫支社長）】

皆様方からそれぞれ様々なご意見、アイデアをいただいたり、いろいろと JR 加古川線に対する思いを聞かせていただいた。これまで、様々なアイデアを利用促進策として実施してきた。そういった取組があっても、なお今この状況ということである。皆様はじめ、鉄道ファンの方々の鉄道に対する愛着は本当に何のものにも代えがたい応援であり、資産でもあると感じている。しかし、なかなかその気持ちが、利用という行動に結びついていないのではないかとというのが、私の認識である。2年前からこうした問題が提起されて、『加古川線、厳しいのではないかと』とか、様々な気持ちが発露されていると思っているし、加古川線リレーマルシェでは多くの方が動員されて、そこに行かれているのは事実であるが、祭りの翌日以降の利用は普段通りといったことが現実である。お出かけ、買い物、旅行、通学等、車を移動手段として使われているのが大半であるというのが、この沿線の実態ではないか。先ほど利用状況の説明をさせていただいたが、コロナ禍から少し回復傾向にある現状にプラスして、利用促進でご尽力いただいている成果も反映されていると思うが、長い目で見ると、少子化によって、今後、通学する生徒も減っていくことは、明らかであり、人口減少やマイカーのさらなる利用によって、減少傾向はこれからも続いていくと思う。持続的に利用いただけるような利用促進策があれば、それを継続していくことが大切で、やはり我々もいろいろなことにチャレンジしているけれども、PDCAをしっかりとまわしていくことが必要である。一方で、先ほど、赤字だから云々といったご意見があったが、そういったつもりはない。もっと赤字のところはほかにたくさんある。この路線は、鉄道というインフラ装置に対して、ご利用が余りにも少ないということが問題だ。

列車が走るところってというのはバラストを敷いて、その上にレールを敷いて線路がある。さらに踏切、信号機、橋梁、駅舎と様々な施設があって、またそれも安全のために、日々、職員が定期的に点検をしたり、保守してメンテナンスをしている。それだけ維持に労力をかけながらも、ご利用が鉄道としては少なすぎる状況である。そういったところを今後、労働力不足といったところにも対応していく中で、長期的な視点で議論をぜひ進めていきたい。鍛冶屋線が平成2年、1990年に廃止になってから34年が経過し、大きく社会情勢が変わっている。当時の想定を超える人口減少に至っている現状であり、また車社会もここまで進展するとは当時想像がつかなかったところである。その中で、将来を見据えながら、以前から申し上げているが、この地域にふさわしい公共交通のあり方の議論を開始していく必要があると思う。

特にこの1年間、利用促進に一生懸命取り組んできた。1年前のこのワーキングチームでは、片山市長と私で議論の応酬と言う場面もあったが、お互い胸襟開いて主張をぶつけ合いながら、サイクルトレインの実証実験を始め、いろいろなことを連携しながらやってきた。しかし、そろそろあり方議論というものを開始していく時期に来ているのではないかと私は考えている。

【片山委員（西脇市長）】

今まさに支社長がおっしゃったように、JRの皆様が、安全安心のために日々努力をいただいていることは理解している。4月だったか、東京からの出張の帰りに、加古川線を利用して帰ろうとしたが、倒木で不通になっていて、谷川駅で呆然とした記憶がある。その時の経験から、地域住民の方との集まりの場で『線路に倒れそうな木や竹は前もって地域で伐採していただくのはどうか』と提案すると、皆さんからのご理解いただいた。自分たちの鉄道を自分たちで守る。線路に倒れてしまった木を撤去することは、（こちらでは）できないが、地元所有地内の倒れそうな樹木を、前もって伐採することはできるのではないかと。強制力のない理念条例的なものになるかも知れないが、条例が制定できれば全国初の取組になると思う。その可能性を探っている。地域住民の組織ができたので、これからは地域住民の方が中心となって、『私達の鉄道だ』『私達の公共交通だ』ということで、守っていてももらわないといけない。少子化になってくる一方で、高齢者の運転免許返納者も増加すると思われる。高齢化が進めば公共交通は大事になってくるので、行政も真剣に考えて行かなければいけない。

【林委員（丹波市長）】

倒木問題に関しては、丹波市でも考えてみたい。さきほど國弘支社長から『なかなか厳しい』との話があったが、今、住民の方が我が事のように、私達の呼びかけに答えてくれるようになった。100周年記念セレモニーの折は大変暑い中、650名の方がオリナスホールにお越しになった。皆さん、『自分たちが動かなければ』という思いを持っておられると思う。また、100周年とか来年の大阪・関西万博とか、そういう契機であるので、後ろ向きな話は、今は難しい。地域住民と一緒に頑張っていきたいと思うので、もう少し待ってほしい。

【國弘委員（JR西日本（株）兵庫支社長）】

両市長からもいろいろご意見いただきまして、せっかくの機会なので、JRとしても、繰り返しの部分はあるが、お伝えさせていただきたい。

先ほど、片山市長から倒木、倒竹の対策で住民の方も巻き込んでと、本当にありがたいお話である。JR用地外から倒れてくる樹木、竹の問題に悩まされており、持ち主と連絡のつかないような斜面もあつたり、雨の時期には様々、ご迷惑をおかけしている実態である。何とかそういった安定輸送にも資するような議論を深めてまいりたい。また、免許返納の話だが、免許返納される住民の方が駅まで遠いとか、駅からまた目的地の病院等とかが遠いとか

の面もあり、鉄道だけでカバーができない問題なので、やはり地域公共交通をどうするかという議論が必要ではないか。また、林市長から『(あり方議論の開始は) 時期尚早』との話があったが、将来を見据えて考えれば、議論は少しでも早く始める方がいいのではないかと思う。沿線住民による協議会が発足されたということは、加古川線の現状に対して、この沿線の住民の皆さんが自らの問題として、加古川線に向き合っていていただいているものと認識している。JRとしても、協議会の皆様と直接対話する機会を持つなどして、さらに相互理解を深めていきたい。また、この意識の高まりをどう鉄道利用という行動に移すかといったことも、やはり必要な観点だと思う。

先ほど、昨年度の様々な利用促進策が報告され、今年度も計画されているが、これ以外にも、JRも発足以来、37年間、消費税の反映を除いて運賃を一度も値上げをせずにやってきており、また、沿線の様々なイベント等を、社内媒体(西ナビ、WESTERなど)を活用してPRするなど、これまでも努力している。さらに30年前から同盟会や協議会といった形での利用促進も取り組まれているが、やはり大きな社会環境の変化の中で、現実には、鉄道の特性を發揮できる水準とはほど遠い。

現在展開中のアフターDCや加古川線100周年の取組、そして来年の大阪・関西万博などが、誘客機会の最大のチャンスというのであれば、そのチャンスを経てもなお、利用の増加に向けた勢いが認められない場合には、加古川線(西脇市-谷川駅間)のあり方議論開始にぜひ応じていただきたいと切に願っている。いかがでしょうか？

【林委員(丹波市長)】

勢いがあるかないか、その時にならないとわからないが、私は先日のJR加古川線(西脇市駅-谷川駅)維持・利用促進地域協議会の設立会での住民の勢いとか、そういうものを信じている。その時には、私たちに勢いがあるかないか、國弘支社長にも見ていただいて、判断していきたいと思うので、ぜひ、頑張ってくださいと一緒に努力していきたい。

【片山委員(西脇市長)】

乗客を増やしたいという思いはJR西日本と一緒にである。JR西日本さんのやわらか頭で、みんなが、わくわくするような利用促進の取組を、万博が終わる時まで一緒になり、泥臭く必死になってやった上で議論をするというのはいいと思う。

【國弘委員(JR西日本(株)兵庫支社長)】

いろいろなアイデアに我々もっと柔軟に対応していけるところがあると思っている。何よりも日々の鉄道の運行を、安全に安定して提供し続けることに尽力するとともに皆様と連携して、やわらか頭で、加古川線の利用促進に取り組んでまいりたいと思っている。

一方で、先ほどから『万博』というキーワードが出ているが、来年4月から10月まで、大阪・関西万博が開催されるが、その閉幕時期において、加古川線の利用の増加に向けた勢いが認められない場合には、いわゆる存廃の前提を置かず、地域にふさわしい公共交通の

あり方議論を開始することに、西脇市、丹波市同市長がご同意いただけたと私は受けとめました。

【片山委員（西脇市長）】

（大阪・関西万博閉幕後の状況によって）廃止を前提としなければ、あり方の議論をするかどうかの議論をすることもやむを得ないが、でもそれまではJR西日本とともに利用促進を進めたい。

【林委員（丹波市長）】

私も同意見で、今の國弘支社長の言葉どおり、JRに頑張ってもらう。私も頑張る、住民の皆さんも頑張るということで、その時期まで、その時になったらやめるという話じゃなくて、その時になって考えようということについては了解する。

<閉会あいさつ>

【林委員（丹波市長）】

本日の議題である令和5年度の実施結果や令和6年度の取組、加古川線の利用状況につき、皆様の貴重なご意見をいただいた。また利用促進について一丸となって取り組むということについては、確認ができたと思う。今年はJR加古川線全線開業100周年、来年度は大阪・関西万博があり、皆様と一緒に利用促進に取り組んでいきたい。